2023 (令和5) 年度 東北アジア研究センター共同研究報告書

提 出 2024(令和 6)年 4月 3日 代表者<u>佐野 勝宏</u>

(本報告書はセンター内外への公開を原則とします)

(不取口目はピングード:	外への公開を原	別としる	59)						
研究題目	和文)ホモ・サピエンスの東北アジアへの拡散と文化的適応プロセス								
₩九超日	英文)Dispersal of <i>Homo Sapiens</i> into the Northeast Asia and its cultural adaptation process								
研究期間	2022 (令和4) 年度 ~ 2023 (令和5) 年度(2年間)								
研究領域	(C) 移民・物流・文化交流の動態								
研究組織	1織 氏名		所属・職名	専門分野	役割				
	佐野勝宏		東北アジア研究センター 旧石器考古学		総括·調査·分析				
	戸塚瞬翼		文学研究科	旧石器考古学	調査・分析				
	金彦中		文学研究科	旧石器考古学	調査・分析				
研究経費	学内資金	学内資金 センター長裁量経費 [金額] 30万円							
	外部資金 (科	基盤研究(A)(代表:佐野勝宏)			[小計]				
	研・民間等)				930 万円				
	合計金額								
研究の目的と本年度 の成果の概要 (600-800 字の間で 専門家以外にも理解 できるようまとめて ください。)	本研究の目的は、ホモ・サピエンスによる東北アジアへの拡散と、地域環境への適応プロセスを復元することにある。約50,000 年前以降ユーラシア大陸に拡散したホモ・サピエンスは、IUP (Initial Upper Palaeolithic) という比較的共通性の高い文化を有していたと考えられる。一方で、東北アジアの IUP はレヴァントやヨーロッパの IUP とはやや異なる特徴を見せ始め、EUP (Early Upper Palaeolithic) の段階になるとさらに地域的多様性が増したと考えられる。こうした現象の背景の一つには、ホモ・サピエンスによる多様な東北アジア地域環境への文化的適応があった可能性が推測される。令和5年度は、日本列島の中部地方における EUP 遺跡の調査研究を行った。IUP と EUP に共通の文化的要素として、「石刃」という石製の規格的な縦長剥片を製作する技術がある。これまで中心的に調査を行っていた東北地方では、信頼のできる年代値をもつ EUP 遺跡が少ないという課題があった。そこで、36,000年前に遡る日本列島最古級の年代が報告されている中部地方の EUP 遺跡から出土した石刃資料の三次元計測を行った。今回の調査により、日本列島における最初期の石刃技術が、ユーラシア大陸における IUP とは異なるものであったことが明確となり、IUP 集団のダイレクトな拡散が想定しがたいとする仮説を補強するデータが得られた。また、東北地方の遺跡に関しては、基部加工尖頭器の形態と機能の関係を解析し、基部加工尖頭器の素材となる石刃は、狩猟具としての利用に適した形態を有するものが優先的に使用されていたことを予察した。また本年度もモンゴル科学アカデミーと東京都立大学と共同で、モンゴルのタルバガタイン・アム遺跡の発掘調査を行った。今回の調査では、石器や骨角器などの資料を新たに得ることができ、東北アジアに拡散した人類の生業戦略を理解するうえで重要な成果を得ることができた。								
本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール	東北アジア地域へのホモ・サピエンスの拡散と文化的適応プロセスを理解するためには、IUP と EUP 双方の石器製作技術や機能、生業戦略を正確に復元し、相互に比較することが不可欠である。本年度の調査では、そうした比較研究を行うためのさらなるデータ蓄積を行うことができただけでなく、モンゴル科学アカデミーや東京都立大学と連携し、モンゴルにおける EUP や IUP 資料の分析を始めるための準備を整えることができた。								

	I					
研究集会・企画	研究会・国内会議・講演会など:0回			国際会議: 0 回		
	研究組織外参加者(都合): 人			研究組織外参加者(都合): 人		
研究成果	学会発表(3)本	論文数	(1) 本	図書(1)冊		
専門分野での意義	[専門分野名]	詳してを対してあった。	分析された事例 いたため、全体 った。こうした 陸における IUI	へて、信頼性の高い年代 川はわずかであり、なお 像の理解や分析の妥当 状況は、日本列島での P との関連性の評価に こうした課題の解決に	かつ定性的な説明に終性を評価することが困 石刃の出現と、ユーラ おいて障壁となってい	
学際性の有無	[有] 参加した専門分野数:			[1] 分野名称[ゲ	ノム人類学]	
文理連携性の有無	[有] 特筆事項: ゲノム人類学との			類学との文理融合		
社会還元性の有無	[有] [内容] NHK BS「ヒューマニエンス」出演					
国際連携	連携機関数: 1 連携機関名:			モンゴル科学アカデミー		
国内連携	連携機関数: 3 連携機関名:			東京都立大学、東京大学、総合研究大学院大学		
学内連携	連携機関数: 1 連携機関名:			文学研究科		
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数:2			参加学生・ポスドクの所属:文学研究科		
第三者による評価・ 受賞・報道など	無					
研究会計画全体のな かでの当該年度成果 の位置づけと今後の 課題	本年度の調査によって、日本列島へのホモ・サピエンスの拡散と文化的適応プロセスを解明するために有益なデータが蓄積できたうえ、モンゴルの IUP の分析を進めるために必要な準備も整えることができた。今後はモンゴルにおける調査分析を進め、大陸部東北アジアにおけるホモ・サピエンスの拡散と文化的適応プロセスの解明につながるデータ蓄積を行う予定である。さらに、これまでに得られた EUP のデータとの比較検討を行うことで、最終的な研究目的の達成を試みる。					
最終年度	該当					

本共同研究に関わる業績(発表予定含む)

[学会発表]

金彦中・戸塚瞬翼「山形県岩井沢遺跡における後期旧石器時代前半期石刃の製作技術とリダクション・シーケンス」『日本旧石器学会第 21 回総会・研究発表・シンポジウム』、多摩市:東京都立埋蔵文化財調査センター、2023 年 6 月 24・25 日

Totsuka, S., Morphological preference for early Upper Palaeolithic pointed blades in the Japanese islands, *The 11th Meeting of the Asian Paleolithic Association*, Suncheon, Korea, August 4, 2023.

Sano, K., Projectile experiments and functional studies on Japanese Upper Palaeolithic sites. *International Workshop: Technology, Typology, Traceology, Paleolithic Toolkits in Eurasia*, Beijing, China, November 3, 2023.

[雑誌論文]

Iwase, A., Sano, K., Nagasaki, J., Otake, N., Yamada, M., 2024. Experiments with replicas of Early Upper Paleolithic edge-ground stone axes and adzes provide criteria for identifying tool functions. *J. Archaeol. Sci.* 163, 105891. doi.org/10.1016/j.jas.2023.105891

[その他]

佐野勝宏 2024. 「狩猟具の発達と新人の拡散-アフリカからヨーロッパへ-」春成秀爾編『何が歴史を動かしたのか。第 1 巻自然史と旧石器・縄文考古学』pp. 85-96, 東京, 雄山閣

*ファイル名は KyodoRpt_年度_代表者ローマ字とする。二つある場合、代表者名の後に 1, 2と記入する (例 KyodoRpt_2013_oka1)。